

巻頭言

循環器病疾患と循環制御

菊池晴彦*

わが国の人口の高齢化に伴い、循環器病疾患患者は増加傾向にある。死亡数では、脳血管疾患は昭和55年の年間162,317人をピークに平成2年の121,944人と減少したが、その後、微増を示し、平成7年には年間146,552人（第2位）となった。心疾患は昭和60年に141,097人と、悪性新生物（187,714人）についで2位となったが、その後漸減、平成7年には139,206人（第3位）となっている。平成8年の脳血管疾患死と心疾患死を合わせると278,000人となり、悪性新生物死272,000人を抜いて、死因の第一位である。

平成8年の受療率でみると、循環系疾患（高血圧、脳血管障害、心疾患）は全年齢層では人口10万あたり1,095人で消化器系疾患（1,316人）に次いで第2位であるが、高齢者になると循環器系疾患の受療率は飛躍的に増大し、65歳以上では10万人あたり5,313人、70歳以上は6,511人と他疾患を圧倒的にひきはなしている。

高齢化社会の到来に対し、循環器疾患への対策の重要性が指摘される所以である。

本年、創立20周年を迎える、国立循環器病センターに、二度目の赴任をして、循環器疾患全体を考え、学ぶ機会を得た。

寡聞にして、日本循環制御医学会及びその機関紙 *circulation control* の存在を知らず、今回、巻頭言をかかせていただく機会を得、最近の学会の活動と、「循環制御」を拝見した。大変魅力のある内容であった。これまで脳神経外科の仕事に携わっていたこともあり、循環制御については、神経性調節に興味をもっている。古典的な循環中枢の概念から、近年の神経伝達物質の研究の進歩により、次第に明らかにされつつある循環調節の機構は誠に興味深いものがある。古くから知られている神経伝達物質と、近年発見された多くの神経ペプチドの、心筋活動や、血管収縮の調節に関する機構の解明が望まれる。日本循環制御医学会と *circulation control* 誌によるこの方面の研究のますますの発展を期待するものである。

会員名簿を拝見すると、麻酔科関係の専門家が大半のようである。循環制御というこの魅力的な学問に、より幅広く、薬理学、生理学、生化学、循環内科学、心臓血管外科学、神経内科学、脳神経外科学などの参加が望まれる。より幅広い研究の展開の中で、私たち脳血管の研究者も参加し、勉強させていただき、循環器疾患の制圧に資したいと考えている。

*国立循環器病センター総長